

1. 「国語」のとらえ方

国語という教科はその特徴から以下の2種類に分けられると考えています。

①情緒の国語

「味わう国語」「鑑賞する国語」とも表現できるでしょう。この学習により実際に文章を読み、その奥に秘められたもの(行間)をとらえ、味わう力を養えます。ただ、この力を養うことは教養の範疇に入るので受験に直接的に役立ちません。逆に「行間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない方向に向かってしまう恐れもあります。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「情緒の国語」に親しむことも大切だと思います。GNOBLEでは中2～中3までは、「情緒の国語」も重視します。

*授業でプリントの中に「考察しなさい」と表現してある問いを設けています。これは「情緒の国語」に属する学習だというメッセージです。本文には根拠が明確に書かれていないが、このような味わい方も可能だということを提案してある問題だと考えてください。

②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっとこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうなると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、例を挙げてみると、「ラーメン」を食べたいと求められて、気を利かせていろいろな食材を過度にトッピングしたり、社会的、一般的な予想をはるかに超える量や金額の商品を提供するのは「間違っていないが、少し違う」のです。まず、「相手(出題者)が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識するべきです。GNOBLEでは、中3のカリキュラムからこの要素を取り入れ始め、高校では情報処理に徹する国語力の養成を提案していきます。

2. 国語の「学び方」

国語において、ただ漠然と「活字に多く触れて読解力を養いましょう」というようなアドバイスは、自分の学力向上が実感しづらく、学ぶ必然性も感じづらくなると思います。授業においては、「なぜ出来なかったか、わかる」「何がわからないか、わかる」「何をすれば解決するか、わかる」ということを各自に意識してもらい、今後の課題を明確化していただけることに努めています。過去一貫して、「何をすればよいか」ということを簡単に図式化し、提案している内容です。

国語の学力を伸ばすには？

① 「文章理解力の充実」

そのために必要なことは

- a 語彙力の充実。
- b 物事についての常識・背景を理解する。
- c 文法は把握する。(古典分野のみ)

② 「解答能力の充実」

そのために必要なことは

- a 設問趣旨を的確につかむ。
*手がかりを十分に拾う。
- b 表現力を充実させる。

①は、文章執筆者との対話といえます。書かれている内容を正確につかむことに必要な要素です。読解能力です。

一方②は、作問者、採点者との対話といえます。求められていることに正確に答えるために必要な要素です。情報処理能力です。

授業でお会いする方については、添削などを通してどの部分が不足しているのかをなるべく具体的にアドバイスするようにしていますし、それが使命だと考えます。

*以下は事務的な連絡なので常体で記します。

3. スケジュール

①中 2～3

[古文]

未知の古文を読み解くために必要な力(文法力、背景の理解、単語力)のつけ方を具体的に提案し、今後の学習を円滑に出来るようにする。文法分野は大学受験に必要な内容を一通り終える(中2前半)。ただ「何をすれば解決するかわかる」「調べればわかる」状態をこの時点でのゴールと考えるので、今後、記憶の徹底、適切な運用のため演習を重ねる必要はある。その充実を目指すため演習を繰り返す機会が中3で、「大鏡」「源氏物語」などを題材に未知の文章を自力で読み解くことが出来るための力を養っていただけるように努めている。

[現代文]

まだ「受験国語」に特化しなくてもよい時期と考えている。中2後半は明治時代から昭和半ばまでに活躍した文学者について、その背景を学び、なぜそのような文学がこの世に生まれ、受け入れられていったかを流れの中でつかむことを提案し、今後の読書力に活かしてもらいたいという内容。その後扱う題材も夏目漱石「こころ」など、中学生レベルとしては難易度の高いものばかりとなるが、このような学習をじっくり出来ることが一貫校に通うメリットではと見え、あえて進学塾ながら徹底的に扱っている。なお、余談ながら、過去この授業を前向きにエンjoyしてくれた生徒の受験結果は極めて良好である。

さらに中3では、中島敦「山月記」、芥川龍之介の「舞踏会」、森鴎外の「舞姫」などの作品を読み、「情緒の国語学習」を楽しみながら、同時に「情報処理の国語力」も充実していただけるように努めている。

②高校

*当塾に通っていただいている方を、過去に担当させていただいた方も加えて考えると、圧倒的に国公立大を目指す方が多い。そうすると、高3では国語にじっくりと時間を費やすことは物理的に難しい方が多いということになる。そこで、高1から高2までの間に、国語という科目について学習法を確立し、方向性も見えた状態とし、高3は模擬試験などでチェックすることにとどめる状態になることが、理想的なスケジュールであると思う。現役で志望校合格を目指すなら、数学は高2の段階で受験に必要な内容を全て終えるのが至極当然となっている現在の受験事情だが、国語もいかによい状態で高3を迎えてもらえるかを自分なりに提案している。

[古文]

基本的な文法事項を学び、さらに演習の中で定着するには1年間と決めて集中的に学んでいくことを提案している。上にも述べたが、特に理系の方は高3時点で基礎から学ぶ余裕は

ないと思われる。原則高 1 で全体像を把握できていて、あとは単語力を充実させながら受験問題にふれて得点力を養うことのみ状態で上の学年にあがってほしいと思っている。

なお、上記の「中 2～3」に示したように GNOBLE でも中学時代に一通り学習して高校生を迎えることになる。これは、一貫校のスケジュールとも言えるので、高校受験を経て高校に進学した方にとって、現役合格のためには高 1 時点の学習が極めて重要である。過去、高 1 で、レベル分けしたクラスの上位を担当した経験があるが、8～9 割程度は高校受験を経ていない一貫校の方だった。

〔現代文〕

得点力の充実に特化した授業を行っている。例を挙げると、選択肢問題については以下の手順を提案している。

- ①設問趣旨をつかみ、
- ②正答に至るための手がかりを探し、
- ③どういう答が正答として提示されるかある程度メド立てをし、
- ④各選択肢の要素を吟味し、
- ⑤先入観を入れず無難なものを選び、
- ⑥見直す。

記述問題については、上記の①～②は同様であり、そのあと適切にまとめて行くことができるかを各自の作成答案を添削しながらアドバイスするようにしている。

いずれの形式においても、「正確な言語的情報処理能力の確立」を目指している。

以上